



大洲高校 PTA 月報

令和2年9月号

会員寄稿

「無意識の偏見」

人権・同和教育課 倉田 敦

今の児童・生徒をネット世代、スマホ世代と例えるとすると、私はテレビ世代と言えるでしょう。白黒テレビの時代からマンガをはじめとするテレビ番組に夢中になった正真正銘の「テレビっ子」です。今もお気に入りの番組があって、視聴するのを楽しみにしています。その番組の一つに「BG 身辺警護人」という番組がありました。6月に放映されたストーリーで心に引っかかっているものがあります。それは、世界コンクール一位を目指す全盲のピアニストを警護するという物語でした。「『全盲の天才ピアニスト世界コンクール一位』なんて言われたくない」「目の見えないことは特別な事じゃない」「目が見えないからピアノが弾けるのではない」といった言葉が番組中に出てきます。私は見ている間ずっと、あることを思っていました。それは以前（何年も前になりますが）、あるピアニスト（辻井伸行さん？）が「全盲の天才ピアニスト」とメディアやニュースでもよく取り上げられていた頃のことです。「どうして『全盲の』とつけるのでしょうかね。あの人は天才ピアニストですよ」と識字学級の先生がおっしゃっていました。私はその言葉を聞くまで何の違和感もなく、ニュースやメディアのおきまりのフレーズ（全盲の天才ピアニスト）を受け入れていました。識字学級の先生の言葉を聞き、「あっ、そうだ」と思いました。でも、「BG 身辺警護人」を見ている間ずっと考えていたのは、かつて「そうだ」と思いながら、実は心の底では分かっている自分を感じていたからです。

話は少し変わりますが、以前（16年前）こんなこともありました。ある人とある人の会話で「男と男の約束」といった言葉が出てきました。後で、同席していた私の隣の人が「あれっておかしくない」と私に問い掛けました。何のことか分からなかった私に「約束に男も女もないやろう」と。そういえば最近はこの様な言葉は聞かなくなったような気がしますが、「男同士の約束は守らなければいけない」という意味で私世代の人間は普通によく使っていた言葉だったと思います。これって「男がえらい」の考えになりますよね。約束に「男同士の」とか「男と男の」とかは要らないですよ。私は無意識のうちに男尊女卑を受け入れていたのだと思います。無意識の偏見は私の中にいろいろあるのだと思います。

無意識の偏見に気付かされることはたまにあって、気付くことで自分の輪郭がぼんやり見えてくるようにも思います。でも気付くだけでは私はなかなか変わらないようです。なんとなく感じた自分の輪郭と向き合い続けたいいけないように思います。